

An abstract graphic on the left side of the page features several overlapping, semi-transparent, curved shapes in shades of yellow, green, blue, and purple, creating a sense of depth and movement. The background is a light blue grid.

# 自然・人類・社会、 その超えるべき課題と未来

Shaping the Future beyond Modernity

# 自然・人類・社会、 その超えるべき課題と未来

2015年3月12日

公益財団法人国際高等研究所戦略会議第1期最終報告書



# 目次

はじめに	3
------	---

## 第1章

高等研の責務	5
--------	---

1. 高等研創立の理念の想起とその実践
2. 高等研の特長
3. 「問いかける力」の涵養と実践
4. 高等研から世界に問いかける意味

## 第2章

人類・地球が抱える課題	9
-------------	---

1. 持続可能性の必要性
2. 課題の複雑化・不確定化
3. 歴史観と世界観の重要性
4. 進歩史観の転換

## 第3章

課題の設定と解決の視点 — 過渡期の智慧と実践力 —	13
----------------------------	----

1. 新たな智慧の創造と新しい時代におけるモデルのデザイン
2. インバランス下のバランス — Wisdom in Transition —
3. 知識創造と社会システムの再構成
4. 資本主義社会の再検討と持続社会の構築

## 第4章

高等研として直ちに取り組むべきこと	17
-------------------	----

1. 将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方
2. 循環型、定常経済社会の構築の必要性との方策
3. 多様な価値観を持つ社会や国家の平和的共存のための方策
4. これらの課題の検討について、開かれた場をつくることの重要性

## 第5章

国際高等研究所の今後の活動	21
---------------	----

## 付録

ISCの議論から出てきた課題例	23
国際高等研究所戦略会議 (ISC) 第1期委員構成	25
国際高等研究所戦略会議 (ISC) 第1期開催経過	25~26

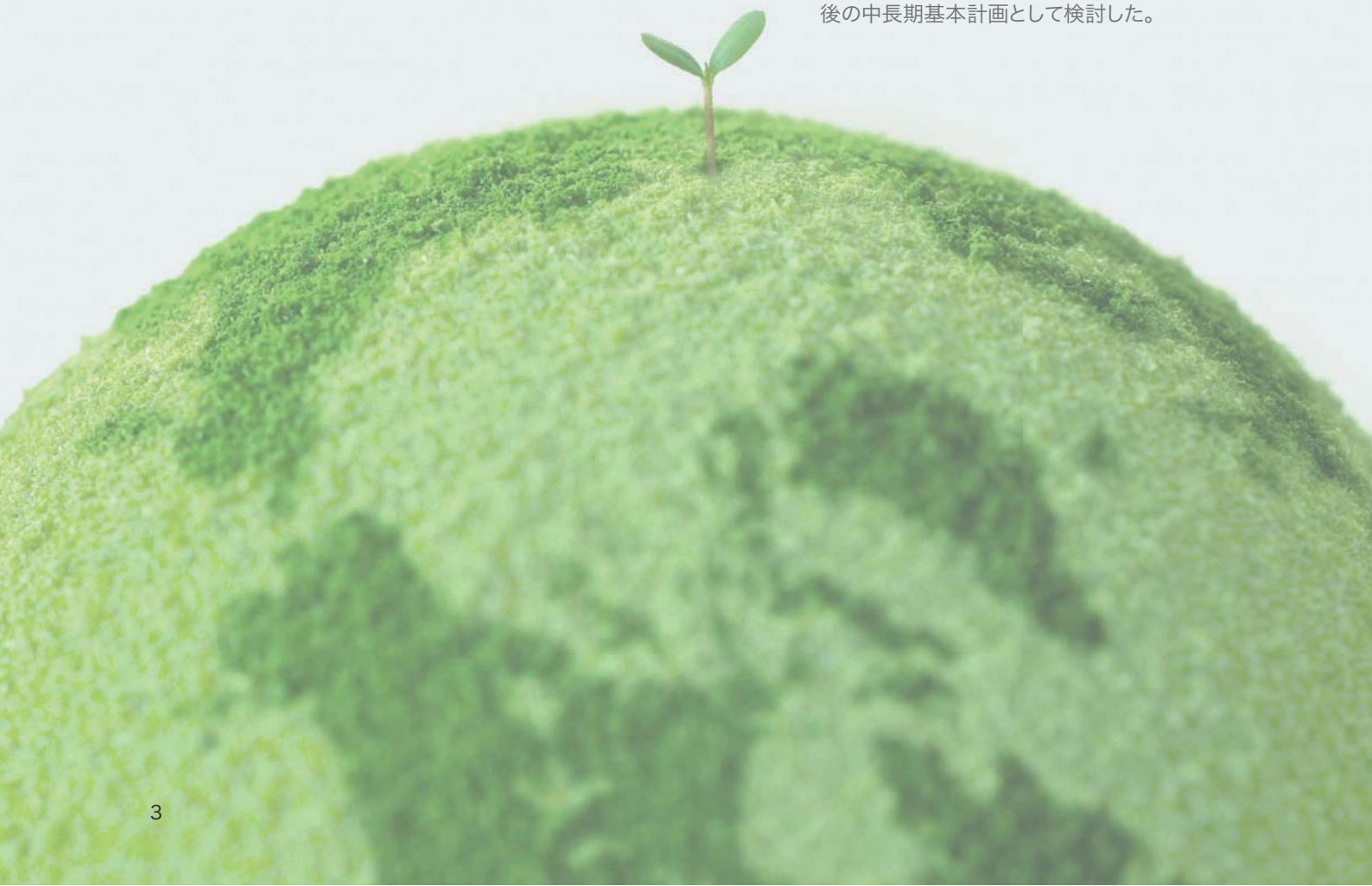


## はじめに

公益財団法人国際高等研究所(以下、「高等研」)は、関西文化学術研究都市(けいはんな学研都市)に、第1章1に示す基本理念をもって設立された機関である。30年を経過し、社会や世界、地球環境等が大きく変わった今日、高等研はその創設の原点に立ち返り、基本理念のよりよい具現化を進めるとともに、今後高等研が現代社会と将来世代に対する役割と責任を継続的に果たしていくため、中長期基本計画を策定し、その基盤を構築することを目的に、立石理事長の諮問機関として、国際高等研究所戦略会議(IIAS Strategic Committee: 以下、「ISC」)を2013年10月に設置した。



ISCは、高等研における今日までの研究成果を踏まえて、新しい時代の変化を読み取り、地球社会の平和的かつ持続的な共存をはかるために必要な共通認識は何かを明確化し、それを実現していくための新しい活動領域を設定するとともに、その成果を社会に積極的に発信し、実践につないでいく方策を、今後の中長期基本計画として検討した。





高等研は設立以来多くの成果をあげてきたが、30年たった今日、地球社会が直面している多くの困難を前にして、

- 1)ビジョンや方向性を明確化しなおすこと
- 2)学研都市の中核機関としてその知的ハブ機能の発揮を期待されてきたが、現状は不十分であり、それを再構築すること
- 3)現代の世界的な大転換期において、何を社会的課題として捉え、その解決に向けてどのような活動を行っていくべきかを原点に立ち返って検討すること
- 4)こうした検討を踏まえ高等研の使命を果たしつつ、世界におけるその認知度を高めること

が必要である。

以上のような視点から、戦略会議は、2014年夏までに5回の会合を持ち議論を展開してきた結果を、中間報告書として取りまとめた。その後、この報告書の内容を具体化するために、高等研にいくつかの検討部会を設けることが必要であるとして、3回にわたってどのような課題を今日設定するのが良いかの議論を行った。その結果を反映した上で、最終報告書を取りまとめた。

本報告書は、高等研関係者だけではなく、広く社会に公開し、意見を求めるとともに、これらの意見を研究所に設けられる検討部会に取り込み、議論をより良いものにしていくことが期待される。

本報告書が、これからの有限資源の地球に住む人類の将来について検討するにあたって一つの指針となることを希望する。

## 第 1 章

# 高等研の責務

基本理念

『人類の未来と幸福のために  
何を研究すべきかを研究する』

運営方針

国際的な研究機関であること

先進的な分野・課題を選んで基礎的な研究を行うこと

研究課題と研究者が固定しないようにすること

産業界と協力すること



## 1. 高等研創立の理念の想起とその実践

高等研創立の基本理念は以下の通りである。

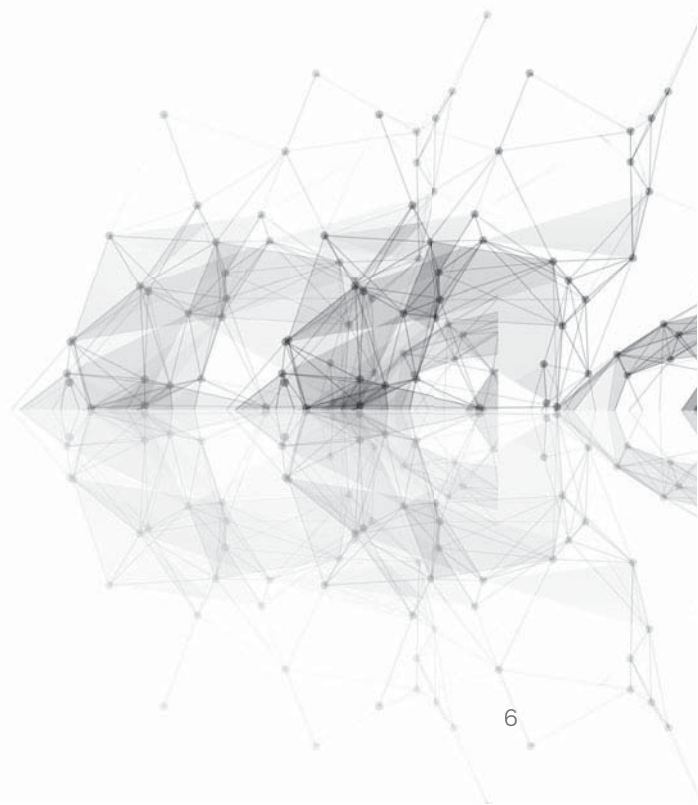
「私たち人類は、現在、様々な要因で持続的生存が脅かされそうな諸課題に直面しています。私たちは、次の世代の人々は、さらにその次の世代の人々は、今までどおりの生き方で、価値観でこの地球上に生存しつづけられるでしょうか。こうした時代的・社会的背景に由来する諸課題にどのように対処していくのか。そして、21世紀にあるべき文化・科学・技術はどのような姿なのか。このような問題に対して考えを進めていく定法はありません。

国際高等研究所は、『人類の未来と幸福のために何を研究すべきかを研究する』ことを基本理念とし、産・学・官の協力のもと、これらの諸課題に基礎的研究によって迫ります。世界の英知を結集してこれらの研究を展開していく中から、学術研究における新しい方向性を生み出し、あるいは新しい概念の創出を指向し、学術研究文化の発展に寄与することを目的とします。」

さらに高等研は創立時に、

「国や研究分野を超えた優秀な研究者が集い、自由な雰囲気の中で交流、討論する場であること」を運営方針とし、下記の4項目を重要な柱としている。

1. 国際的な研究機関であること
2. 先進的な分野・課題を選んで基礎的な研究を行うこと
3. 研究課題と研究者が固定しないようにすること
4. 産業界と協力すること



## 2. 高等研の特長

高等研は、長い日本の歴史において文化的・経済的価値を創出し、蓄積してきた京阪奈の中心にあって、**日本の優れた文化・芸術・技能・技術・風土・環境を俯瞰し、課題の発見から解決まで、それらを総合できる位置にある。**世界中でいくつかの類似機関があるが、こういった歴史的・社会的環境の中で高等研は、ユニークで自律的な特長を発揮することができる。

したがって教育者・科学者・企業人・知識人・宗教者・一般市民が、国や組織、分野を超えて相集い、自由な雰囲気と規律の下に討論し、ここを起点として知識や文化、社会、経済の新しい方向性を見出し、実践していく場とすべきである。**そのことは、人文・社会科学系の知識社会への貢献の低さが取りざたされる今日、身を以て一つの答えを示すことにもなる。**

## 3. 「問いかける力」の涵養と実践

現代は、これまでの近代主義的な考え方や行動が持続しえないトランス・サイエンス時代を迎えているといわれる。このような時代にあって、ますますグローバル化されていく世界における諸国家、諸民族間の共存、人類社会の持続可能性についての根源的な課題を探究し発見し、これを世界に問いかける必要がある。さらに、今後の高等研の社会的存在意義として、内外の様々なセクターと議論し、解決策を模索し実践することは極めて重要である。

こうした観点から、「何を研究するかを研究する」という創立時の奥田東先生の理念は、現在も鮮明で極めて重要である。

**「問いかける力」は、「知力」、「想像力」、「洞察力」であり、「情報力」であり、「財力」も必要である。**この多角的な力を組織として一元的持続的に保持するためには、高等研の創立の基本理念を踏まえて、研究と実践活動を行う体制と人材、資金を確保する必要がある。





#### 4. 高等研から世界に問いかける意味

日本は狭い島国であるが、四季をもち豊かな自然にめぐまれ、神道や仏教など穏やかな宗教によって寛容と忍耐の精神を培い、まじめに工夫しながら生きるという人間力を磨き、日本が誇るテクノロジーを創り、さらに全体の調和を保つという美的センスともいうべき考え方で歴史を刻んできた。今日の地球社会は、文明の発展によって有限の地球となってしまうことは明らかである。このいわば**宇宙の中で島国**となってしまった地球で、**人類がお互いに平和的に共存していくためには、日本人が歴史的に築きあげてきたものの考え方の重要性を世界に問いかけることが大切**であり、こういったことは日本から、高等研からしかできないことであろう。

このような考え方は日本だけでなく、世界のあらゆる国、民族、人々がよく理解し、共有し、相互協力して実践していかなければ、地球と人類社会の将来は危ういといわざるをえないだろう。したがって高等研は、これから将来へ向けての方向性、内容を具体的に固めていくとともに、世界のいろいろな団体等に呼びかけ、お互いに協力してこのような運動を進めていくことが大切である。

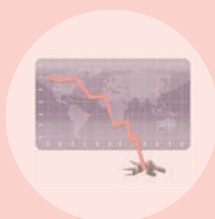


## 第2章

# 人類・地球が抱える課題

議論を行うに際しては、地球社会が直面している種々の困難の現状を俯瞰的に把握することが大切である。

次のように課題を整理した。

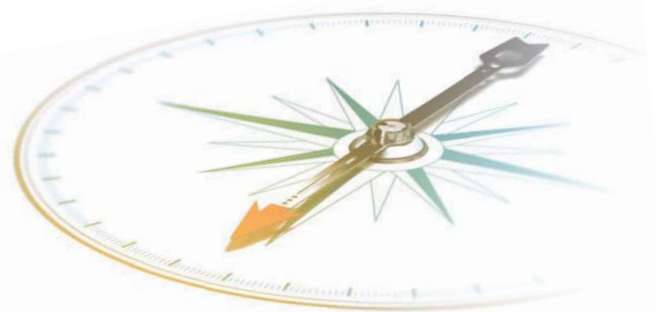


## 1. 持続可能性の必要性

人類と地球が直面している諸課題は、グローバリゼーションによる国や地域の文化や特性を考慮しない画一化の進展と、地球の有限性、資源や環境、そして人知の限界を考慮しないまま、「成長」と「競争」を継続してしまったことに起因している。また、多様性を理解し、受容できないことによる矛盾は、ますます深刻化している。

金融資本主義とグローバリゼーションが世界を席卷した結果、1972年のローマクラブによる『成長の限界』が指摘した環境問題や資源枯渇は悪化し、貧困は解消せず、経済格差は国家間のみならず人々の間にますます広がり、テロの温床が生み出されつづけ、紛争は絶え間なくつづいている。人類と地球は、平和共存はおるか、今のままでは持続不可能な方向に向かってしていると懸念せざるをえない。

今日の世界は政治的混迷、軍事紛争の拡大と不確実性の増大、経済的危機の頻発、科学技術の急激な発展の下で、人間の生き方の本質、倫理、道徳などが軽視され、「人類の幸福」や「持続可能で住みやすい地球」が失われつつある。今、人類社会は単一的な「進歩発展」といった考え方から「人類の平和的・持続的共存」という考え方への転換の分岐点にあり、これまでの歴史的な趨勢を転換することが必須である。





## 2. 課題の複雑化・不確実化

高等研設立から30年が経過した。この間、日本および世界のありようが、歴史的に大きく変化している。資本主義の暴走、民主主義の限界、少子高齢化など、社会経済的課題はますます複雑かつ不確実になっている。

人類と地球全体の将来を考えた時に、**経済的価値の追求だけでなく、それ以上に、人々の幸福や社会の安寧への価値観の転換が重要**となっている。こうした現代的課題を、先進国も途上国も十分に認識せず、この方向転換への努力を怠っている。発展途上国は、先進国が進めてきた負の遺産に学ばず、有害廃棄物のことを考えない持続性の欠けた工業化、金融資本主義的な方向で繁栄を求め、人口も増加している。こうした地球規模でのインバランスが今後数十年は継続することが懸念される。

社会的課題は矛盾やトレードオフ関係を内包しているため、一意的に回答を得ることはできない。**個々の実践事例を積み上げながら、人類と地球の持続的な未来を実現する方策を探求していく**という価値観と行動様式が求められる。

## 3. 歴史観と世界観の重要性

人類はルネッサンス以降、近代化による発展を成し遂げてきたが、経済的価値のあくなき追求は、人類・生物・資源・環境等の持続性への配慮を稀薄にした。

また、極端な市場中心主義の下で、評価の軸は経済的価値に重点がおかれ、経済合理性を過度に追及してきたことによる弊害が今や頻出し、人類と地球の生存にとって危機を迎えている。このため、教育・学術・科学技術・文化・医療・安全・自然・資源・景観など、生活の質の向上、社会的な安寧に寄与する分野への投資に配慮する必要がある。

こうしたルネッサンス、産業革命以来の近代の趨勢を、新しい歴史観と世界観をもって大きく転換することが求められる。「有限な地球上で、すべての人々が平和的に共存していくにはどうしたらいいか、その中で日本の役割は何か」を考え、実践する方向に大きく舵を切る時期を迎えている。

阪神・淡路大震災や東日本大震災という未曾有の自然災害が、経済大国で起こったということは世界的に非常に稀なことである。この大災害が引き起こした困難を、21世紀の新たな価値観やソフトパワーを創造することによって克服する中から、日本は、それがもつ意味を世界に周知させることが大切である。これが、復興にあたって日本が支援を受けた国々と人々に対する恩返しでもある。

## 4. 進歩史観の転換

「科学的進歩・経済的発展」という近代の概念が一義的には成り立たない時代を迎えて、科学技術を人類と地球の持続性・平和と幸福のために使用するという視点に立ち、さらに、科学技術だけで人類・地球が抱える課題を解決できないという時代(トランス・サイエンス時代)を迎えて、**科学技術だけでなく、倫理・思想・哲学・歴史・文化・芸術などを重視して、協働して、課題の解決にあたる**という基本に立つ必要がある。





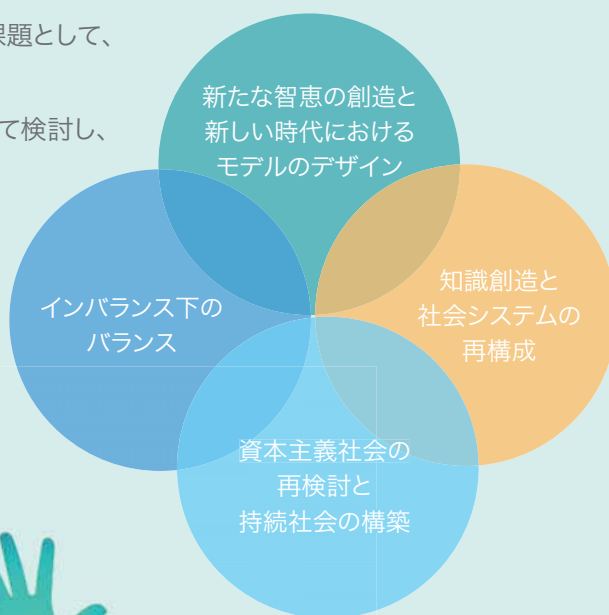
# Trans-Science



## 第3章

# 課題の設定と解決の視点 — 過渡期の智慧と実践力 —

第1章と第2章で述べた高等研の理念と責務、時代認識・世界観を踏まえて、過渡期としての21世紀の前半をカバーして検討すべき課題として、付録に示すような多くのものが上げられた。これらのうち今後高等研が取り組むべき研究領域について検討し、当面考えるべき活動の問題意識は次の通りとした。



## 1. 新たな智慧の創造と新しい時代におけるモデルのデザイン

地球上の誰もが幸福に暮らせる社会、持続可能な地球を実現するためには、国や民族のみならず、宗教、言語、多様な文化を超えて認め合い、「寛容」と「互恵」を根本に、新たな思考の枠組みと智慧を創出し、新たな社会の秩序やシステムをトータルでデザインしていかななくてはならない。この一環として、日本人の伝統的な価値観や精神性を考慮に入れる。

日本をはじめとする先進国においては、人口が縮小していくことは、もはや決定的であり、縮小モデルを構想せざるをえない。その縮小モデルを土台にして、世界の中で存在価値を示すような国になるという新たな「持続可能型先進国モデル」を考え、提案することが重要である。

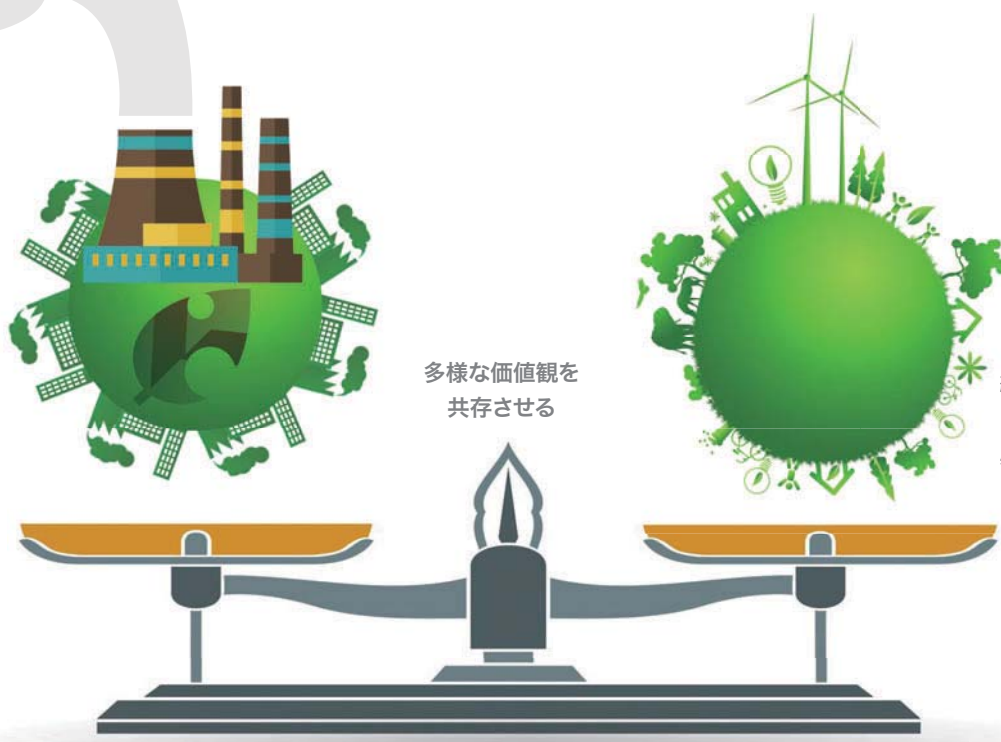


## 2. インバランス下のバランス

### — Wisdom in Transition —

21世紀前半の人類と地球のあり方を考える時、縮小前提の「新たなモデル」が必要な国・地域と、一方で、なお人口増加があり、生産力を上げ、資本主義的な方向で繁栄を求め、かつそれを実現できる可能性を信じている国・地域が併存するという過渡期の不確実で危険なインバランスが想定される。これを、どういう形で調整し、よいバランスの中に、人間の尊厳を維持しながら、人類と地球全体を移行させていくかを探求することが必要である。

多様なものを受容するだけでなく多様な価値観を共存させるという考え方を戦略的に深める必要がある。



資本主義的な方向で  
繁栄を求め、かつそれを  
実現できる可能性を  
信じている国・地域

多様な価値観を  
共存させる

縮小前提の  
「新たなモデル」が  
必要な国・地域



### 3. 知識創造と社会システムの再構成

人類全体としてみると、集中的な投資を受けている分野もあるが、教育・学術・科学技術・文化・安全・医療・自然・景観などへの資本投資が相対的に乏しく偏在しているように見える。この弊害を解消し、個人の安寧と社会的安定性を確保するため、資源配分のあり方を検討する必要がある。

現代の知識の創造と社会経済システムのメカニズムを俯瞰し見直し、過渡期を超克し、新しい価値と持続的なダイナミズムをもった人類と地球に移行するための哲学と方法について検討することが重要である。



### 4. 資本主義社会の再検討と 持続社会の構築

地球資源が有限であることがますます明らかになってきている中で、従来の資源を利用しつくし、利潤を上げる資本主義をどうすべきか、地球社会を、できるだけ永続させていくためには、地球上のすべての活動が相互循環的で、できるだけエネルギー損失の少ない、持続可能な社会システムを構築しなければならないが、これをどう設計すべきか、などについて真剣に検討する必要がある。特にグローバル資本主義、貧富の差の拡大の問題について、これからどうすべきかの検討が必要である。

## 第4章

# 高等研として直ちにに取り組むべきこと

第3章に述べた多様な問題意識に対しては多くの検討部会を立ち上げて相互関係に配慮しながら議論を進め、解決への道筋を明らかにしていく必要があるが、一度にこれら全てを取り扱うことは難しい。

地球上の資源が有限であるという認識のもとに最も大切な課題として、まず次の3つの課題について部会を立ち上げ、相互関連性に配慮しながら集中的に議論し、2、3年である程度の結論を得ることを目標とする。これらの課題を集中的に検討する中で、新しく部会を作って検討するのが適当であると判断される課題が出てくれば増やしていくことにする。



## 1. 将来の地球社会を考えた時の科学技術の在り方

現在、科学技術研究体制のグローバル化、デジタル技術の革新的進歩、社会経済が解決すべき課題の複雑化・グローバル化、社会経済的価値創造と科学技術研究の接近といった状況の下で、数百年のスパンで築かれてきた近代科学の方法とその思想的枠組みが大きな転換期を迎えている。

この問題については世界の各所で様々な議論が行われているが、これらを歴史的かつ同時代的に俯瞰す

るとともに、学問とは何か、科学技術とは何か、大学とは何かといった根本的問題についても再検討する。その中で特に迫りくる有限資源の地球、深刻な環境破壊・汚染といった地球社会が直面している問題を前にして、科学技術活動をどのようにすべきかを具体的に検討することが大切である。そして世の中に問いかける活動をする。



## 2. 循環型、定常経済社会の構築の必要性とその方策

人類にとって差し迫った課題である有限資源の地球を考えた時、資本の飽くなき富の追求という現代資本主義の形態のままで行けば、地球資源の枯渇を招き、貧富の差を拡大し、人類に早期の破滅をもたらすことは明らかである。したがって進歩発展という概念を越えて、**定常的、循環的な経済、持続可能な社会を構築し、貧富の格差をできるだけ縮小し、文化的な生活を保障する社会にしてい**くべきであろう。その姿とそこに軟着陸していくための方策を検討する。

そのためには循環ということの定義とその具体的内容を明確にすることが必要である。そして循環の度合い、すなわち循環率を計算できるようにし、これを各国、各社会、あるいは各分野に適用し、循環率の低い社会あるいは分野はどこに原因があるかを明らかにし、制度的、科学技術的に改善できるよう検討する。そのためには、種々の社会的、政治的な枠組みや規制、あるいは解決のための科学技術等を国際的に作っていく必要があり、これを政策的立場から検討する。







### 3. 多様な価値観を持つ社会や国家の 平和的共存のための方策

種々の考え方、多様な価値観、倫理観、宗教等をもつ人々や社会、国家が平和的に共存できない原因は何か。その原因を取り除くための方策、そこから平和的共存に到る道をどうすれば描けるかについて検討する。そのために現在広く使われている経済活動の指標であるGDPに代わる人間中心の価値観に基づく指標を検討し、これを世界的に議論するネットワークを構築する。そこでは有限の地球資源を大切にした循環型、定常経済社会と、価値観、倫理観、宗教等の違いを克服して人々が平和共存できるための方策という視点を重視する。

この課題は極めて困難なもののように思われるだろうが、人類はこれまで倫理、道徳、あるいは宗教などによって克服する努力をしてきた。類似の課題は既に世界の各所で取り上げられ議論されているので、まず、これらを集積し俯瞰的に検討する。寛容と協調、互恵の精神を基盤にもつ日本において検討することによって、他にない観点からの提案ができ、世界におけるこの種の議論をリードすることができるだろう。

これら3つの課題は相互に密な関係をもつので、常に全体を調整し、情報交換と相互交流をしながら議論を進めることが大切である。たとえ10年以上かかるとしても、地球規模でのプラットフォームを形成し、実現に向けて努力していくことが必要であると考え。これらの課題を有効に実行していく体制と方法について、高等研の30年にわたる実績と限られた資源を踏まえて、現実を見据えて至急検討する必要がある。

### 4. これらの課題の検討について、 開かれた場をつくることの重要性

上記の3つの課題は有識者による検討部会をそれぞれにつくり鋭意検討するが、いろいろな局面において社会の多くの人達に検討内容を明らかにするとともに、そういった人たちの意見を求め、検討を深めていくことが必要である。こういった場合は適宜シンポジウムの形式であったり、またネットを活用していくことも検討に値するだろう。特に次世代を担う若い人達との協働の議論の場を工夫すべきであろう。このような活動によって高等研の研究活動の重要性が社会に広く認識されることにも繋がっていくことになる。



第5章

# 国際高等研究所の 今後の活動



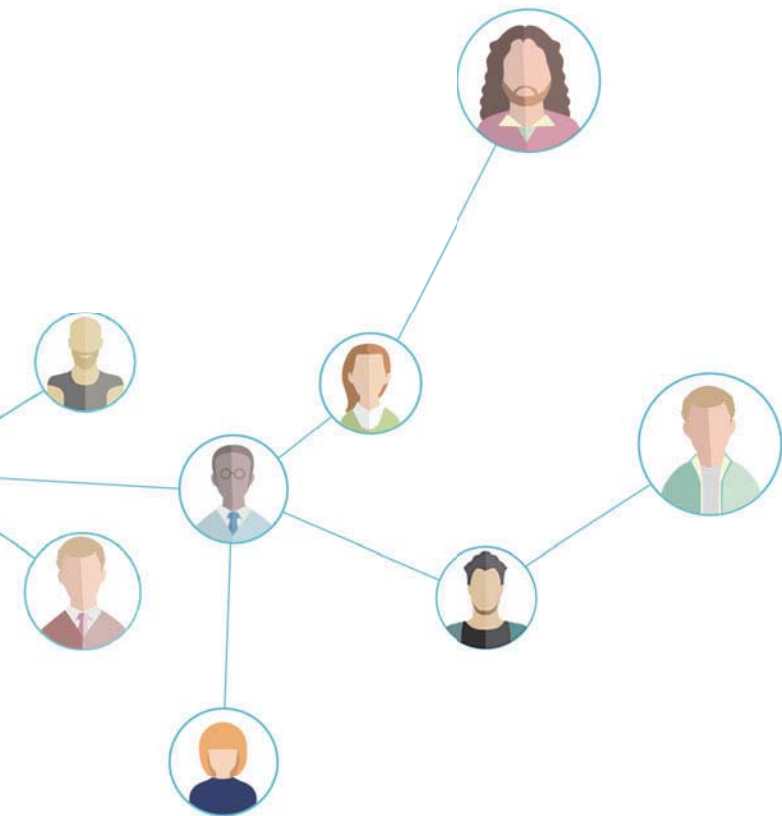
ISCとしては、これまでの議論に基づき、持続可能な社会の構築のために超克すべき課題について議論を深め、高等研の運営戦略および事業活動の基本方針を含む中長期基本計画を、最終報告として取りまとめた。

高等研は、ISCの最終報告に盛り込まれた各課題に対するその後の具体的な取組みについて、2015年4月以降に所内で検討のうえ、できるだけ早く個々の課題に係る研究プロジェクトをスタートさせることが望まれる。

個々の課題における検討および研究プロジェクトを、国際的な視点や規模で実施するために、内外の財団やシンクタンクとのネットワークの構築に努め、協働に向けた基盤を整えねばならない。その準備として、協働先の候補となる組織の理念や活動の調査、それらの組織との架橋に繋がる人脈の醸成が必要である。さらに、高等研の個々の研究成果の英語版小冊子の発行、シンポジウムやセミナーの継続的な開催による社会への問いかけといった活動も重要である。

こうして我々の持つ問題意識を国際的に発信し、世界に問いかけ、世界と議論し、解決策を考え、社会実装を目指していけるようになれば、高等研としての固有の価値を創出し提供しつづけられると考える。

その活動を世界的かつ実効性の高いものとするには、例えば世界的に多大な影響力を保持する財団、シンクタンク等との協調による高等研の活動の多様化や活発化を図り、協力関係を構築することができる国内外のシンクタンクや研究所等の発掘とネットワーク構築についても迅速に取り組み、その上で経営の安定化を図る必要がある。



## (付録)ISCの議論から出てきた課題例

ISCの議論から浮かび上がってきた課題を以下に示す。

これらの課題を整理しなおし、高等研としてとりあえず集中的に検討すべき

課題として3つに絞ったものを第4章に示した。

### 1 脱成長

幾つかの先進国で、20世紀の共通概念であった「成長」という考え方を超えた「脱成長」という概念が議論されはじめているが、それらを精査し、我々として何が提案できるかを検討する。

### 2 江戸時代、そこからの冒険の変遷

日本の精神史・文化史を踏まえて、持続可能社会の実現に向け、日本から何を世界に提言できるかを検討する。特に江戸時代の社会生活、町人文化の中にある資源循環的思考方、生活道徳、また寛容と互恵の精神などは、これからの有限の地球上で共存していくためのヒントとなるのではないかという点に着目。それ以降、明治維新から日本が辿った道を振り返り、21世紀においてアジアの近隣諸国との平和共存の将来をどのように構築するかを考え、グローバルな世界において日本文化の持つ力を積極的に評価し、将来の人々の生活の安寧に繋いでいくにはどうすればよいかを議論する。

### 3 ELSI (科学技術が及ぼす倫理的・

#### 法的・社会的課題)

科学が複雑な社会課題を対象として、理工系・人文系の協調や、トランス・サイエンスな取り組みを繰り広げる場合にあたっての交点として、ELSI (Ethical Legal Social Issues) を取り上げ、共通のプラットフォーム、融合したモデルを策定する。

### 4 インバランス下のバランス

地球全体の将来を考えた時に、「経済成長に依拠しない幸福観や社会のあり方」が必要な国・地域と、旧来からの資本主義的な成長志向を継続していく国・地域が併存するというインバランス下で、よいバランスの中に地球全体を残せるモデルを検討する。例えば、「エネルギー資源」、「医療資源」などのインバランスや格差を取り上げ、専門的に掘り下げていく。

### 5 生産消費活動

有限資源の地球において現在のようなグローバル資本主義的企業活動をそのまま続けていくことはできないし、その結果生じる貧富の差を放置してはならない。では、どのような生産消費活動が考えられるかを議論する。



## 6 持続不可能な個別課題への対応指針

地球温暖化、水、食糧、資源、人口、エネルギーなどの困難な課題を持つ地球の将来を立て直すため、これら諸課題における対応の方向性を議論する。これらについては、各所で様々に検討が進捗しているが、ここでは、新たなモデルの適用や、地球上のインバランスへの対応を前提とし、グランドデザインの提示を目指す。

## 7 目標達成の進捗を図るためのKPI設定

今後の地球社会が協調をもって節度ある発展が果たしているか、人類が超えるべき課題の先にあるべき未来が築けているのか、それらの目標達成をモニタリングするためのKey Performance Indicator (KPI)を検討し、進捗の把握や目標の共有方法について議論する。

## 8 幸福のあり方

20世紀は工業化の振興を主軸に展開されたこともあり、物質的な豊かさが幸せをもたらすとの認識が強くなり、GDPのような経済的・財務的価値をはかる指標が幸せをはかる指標のように見られた。持続可能社会における幸福のあり方を議論すると共に、Quality of lifeや文化的リテラシーの向上など、新たな幸福の概念構築に必須の要素につき議論する。

## 9 人類的・地球的課題の社会への

### 訴求のあり方

人類や地球の抱える課題は、既に深刻なレベルに達しているにも拘らず、「不都合な真実」として取り扱われ、「ゆでガエル」化した人類の積極的な解決行動は希薄である。そこで、このままでは人類社会が崩壊の道を辿ること、その深刻さを明確に打ち出し、解決のための努力が必須であることを強調し、訴求していくため、具体的に示す議論・研究を進める。

## 10 社会への実装のための具体的な

### デザインング

ISCにおける議論を、具体的かつ早期に社会実装するための総合的な施策群を創り込む。国や民族の違い、多様でレベルも様々な文化的リテラシーを超えて、世界中の人々に理解され、実践されるよう、「共感→問題定義→プロトタイプ→テスト」といったプロセスを繰り返し、世界観を共有しながら、人間の多様性、地球の有限性に根差したソリューションを作り上げる。

## 11 グローバルプラットフォームとの連携の

### ための調査、共同テーマの策定

グローバルな活動を展開している世界的な財団等と連携していくため、徹底的にそれらの活動内容を調査すること、さらに、それらを超えた立場、もしくは考え方をもち、新たな共同テーマを構築、提案し、具体的な連携に持ち込む。(本テーマは今年度ISCの中で先行して検討に着手)

## 国際高等研究所戦略会議(ISC)第1期委員構成

(敬称略・五十音順)

議長



長尾 真

京都大学名誉教授・京都大学第23代総長

委員



有本 建男

政策研究大学院大学教授



大原 謙一郎

公益財団法人大原美術館理事長



笠谷 和比古

国際日本文化研究センター教授



黒木 登志夫

日本学術振興会学術システム研究センター相談役



村上 陽一郎

東京大学名誉教授  
国際基督教大学名誉教授

## 国際高等研究所戦略会議(ISC)第1期開催経過

第1回

日時：2013年12月2日(月)8:30～11:00

場所：ホテルグランヴィア京都

議題

- (1) 国際高等研究所設立の趣旨を振り返る
- (2) 最初の10年間の活動と現在のそれとの比較
- (3) 問題提起(今後の活動の内容について)
- (4) ISCメンバーの構成について
- (5) その他

第2回

日時：2014年1月30日(木)15:30～18:00

場所：公益財団法人国際高等研究所

議題

- (1) 「地球の未来」～持続可能社会の構築に向けて
- (2) ISCメンバーの拡充について
- (3) その他

第3回

日時：2014年4月2日(水) 10:00～14:00

場所：公益財団法人国際高等研究所

議題

- (1)「伝統文化とグローバリゼーション」について
- (2)今後のISCの進め方について
- (3)その他

第4回

日時：2014年5月7日(水) 14:00～17:00

場所：公益財団法人国際高等研究所

議題

- (1)ISC中間答申について
- (2)今後の予定
- (3)その他

第5回

日時：2014年7月10日(木) 10:00～12:00

場所：公益財団法人国際高等研究所

議題

- (1)ISC中間答申について
- (2)ISC中間答申の取りまとめに係る担当委員の指名について

第6回

日時：2014年12月16日(木) 11:00～15:00

場所：公益財団法人国際高等研究所

議題

- (1)最終答申で注力する事項について
- (2)高等研の研究事業として2015年度に着手すべきテーマ候補について
- (3)創設30周年記念フォーラムの開催について
- (4)その他

第7回

日時：2015年2月2日(月) 11:00～15:00

場所：公益財団法人国際高等研究所

議題

- (1)高等研の研究事業として2015年度に着手すべきテーマ候補について
- (2)ISC最終報告案について
- (3)その他

第8回

日時：2015年3月12日(木) 10:00～11:30

場所：公益財団法人国際高等研究所

議題

- (1)ISC最終報告案について最終審議
- (2)ISC最終報告書のソーシャルコミュニケーション展開について
- (3)高等研2015年度研究テーマについて(報告)
- (4)けいはんなフォーラムにおけるパネルディスカッションについて
- (5)その他



〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地 TEL:0774-73-4000 FAX:0774-73-4005  
<http://www.iias.or.jp>